
愛は盲目

Drealist

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛は盲目

【Nコード】

N2129C

【作者名】

Drealist

【あらすじ】

大学の入学式。その日、泰地はある女性に一目ぼれをしてしまう。彼は告白を決心する。そして彼は知る。

泰地は青空を眺めていた。雲一つない、正に快晴と言うべき天気だ。

暖かい陽射しに、代菅泰地よすがたいちは眠気を覚えた。つまらない入学式の後とあらば、尚更である。

校舎から流れ出る人波を、泰地はぼんやりと眺めていた。疲れた首をコキコキと鳴らし、あくびを一つ、噛み殺す。流れの中には、もうナンパをしている野郎がいる。入学早々お盛んだこと。

血気盛んな野郎を見ると、疲労が倍増する。何をしに大学へ来たんだと叫びたくなる。だが、泰地自身何かをしたくてこのU大に入学したわけじゃない。だから、文句を言える立場でないことは、泰地本人も分かっている。ただ、ここしか入ることが出来なかつただけなんだから。

勉強なんてクソ喰らえ。それが泰地の信念だった。目標もない、そしてやる気もない泰地は、社会からあぶれるのが嫌で、取り敢えず大学へ入っただけだった。

何とか合格し、入学こそ出来たのだから、大学にいる間に何か見つけたい。そんな曖昧な考えしか抱いていなかった。

人の波に流されるまま歩いてきた泰地は、再び空を仰いだ。その所為で歩みが止まり、泰地は後から後から流れ出る波に押された。そして、泰地は派手に倒れてしまった。ピタン！ と大きな音が鳴った。

「いたたたたた……」

「大丈夫？」

顔を強打した泰地に、ハンカチが差し伸べられる。

「鼻血、出てるよ」

その言葉に、泰地は指で鼻を擦った。指には赤い血が付いていた。「ああ、大丈夫。ちよっとつまづいただけだから……」

そう言いつつも、鼻血というアクシデントに恥ずかしくなり、慌てて出されたハンカチで鼻を拭う。するとハンカチが真っ赤に染まる。

「あっ」

その声を上げ、相手の顔を見上げた。泰地は、一瞬動きを止めた。か、可愛い…

「大丈夫ですか？ まだ血、でてますよ」

彼女の顔を見て呆けていた泰地は、その言葉で目を覚ました。

「ご、ごめん。このハンカチ、こんなに汚しちゃって」

鼻を押さえるハンカチが、見る見る朱に染まる。

「いいんですよ。ハンカチ一枚ぐらい」

向き合って話していると、泰地の頬はだんだん紅潮してきた。さつきは彼女のことを可愛いと思ったが、あれは間違いだ。ものすごく可愛い。見れば見るほど可愛いと思う。彼女が何か言っているが、耳には入っていない。ただ、可愛いという感情しか湧いてこない。「ねえ、大丈夫？」

その言葉に反応して、身体がびくと震えた。茫然自失だった泰地は、今度は恥ずかしくなり、頬を赤く染めた。

「え、あ、ああ、ダイジョブダイジョブ。あ、こ、このハンカチ後で、返すから」

そうまくし立てて、泰地は走り去った。

「あ！ まだ鼻血止まってないのに…」

帰宅してからというものの、泰地はあの女の子のことしか考えられなくなっていた。何をしてもなく、ただ悶々とし続ける。ストレスが溜まっていた泰地は一つ大声を上げた。

「あああああああああああああああ！」

そう叫ぶや否や、泰地は居ても立っても居られなくなり、家を飛び出した。

足は自然と大学へ向かう。頭ではどんなことを言おうか考えていた。キザでクサイ台詞、遠まわしに、でも優しい言葉、有無を言わせぬ強引な告白。色々な考えが浮かんで消え、浮かんで消えていった。

考えがまだまとまらない内に、大学へと着いてしまった。言葉を選ぶことも大事だが、先ず何よりも彼女を探すことが先だ。俺はとにかく歩き回った。

何も考えずに歩き回っていたが、10分もすると彼女を見つけたことが出来た。彼女は、芝生の上で木を背に、本を読んでいた。歩み寄ろうと前へと進む。だが、泰地の右足は一步前に出ただけで、停まってしまった。始めに話しかける言葉は何にしよう。考えていなかった。

浅はかだった。思えば、俺は彼女の名前さえ知らない。そもそも面と向かって話し合ったこともない。ただあの瞬間、目が合っただけだ。考えれば考えるほど、泰地はネガティブになっていく。さっきまでの勢いが、瞬く間にしぼんでいく。彼は完全に勇気を無くし、すぐ側の噴水の縁に腰を下ろした。彼女は、春の心地良い風に吹かれながら、穏やかな表情で本を読んでいる。

彼女を見つめていると、その表情の柔らかさに和んでしまう。ページを繰っては微笑み、繰っては顔を曇らせ、また繰っては瞳を潤ませる。遠くから眺めているだけに、彼女の感情の豊かさに驚かされる。そして、やはりその表情を見ているだけでは辛くなる。もっと側で見たいくなる。

どうして俺は、こんなに純な気持ちになっているんだろう。こんなに初な感情のは、初恋の頃にも抱いてはいなかった。

全くの他人に、突然告白されても困るだけだろう。彼女の表情を見ているだけで悶々としていた泰地は、そう考えて、今日は告白を諦めようと思った。

帰ろうと泰地が腰を上げたそのとき、彼女も本を閉じ、立ち上が

った。そして、本を鞆にしまうと、彼女は泰地の方へと歩み寄ってきた。泰地は動揺した。心の準備が出来ていなかった。そんな彼の挙動不審さを気にもせず、彼女は表情をそのままに、泰地との距離を縮める。そして、彼女は泰地の横を素通りした。

通り過ぎる瞬間、泰地は彼女の顔を見た。透き通るような白さ。それを感じた時には、もう彼女の腕を掴んでいた。

振り返る彼女。泰地は自分のしたことが分からず、何も考えられなくなる。そして、泰地ははっきりと言った。

「あなたが好きです。」

目の前の女性が、目を見開く。泰地は自分が発した言葉に驚いた。そして、彼女は泰地を真っ直ぐ見つめた。

「うん」

その言葉には泰地は驚かなかった。そして2人は見つめ合った。

泰地は彼女の腕を掴んだまま、啞然としている。彼女は、ただ微笑んでいた。

泰地は、真緒まおの公園へと歩いていった。今日も泰地は、真緒に呼び出されていた。今日は、料理の味見をしてほしいらしい。いつも色々な用件で呼び出され、泰地は忙しく真緒の家を訪ねる。おかげでまだ付き合い始めて2週間だと言うのに、彼女の家までの道を覚えてしまった。俺は記憶するのが何より苦手なのに、と思いながら、泰地の表情はほころんでいた。

泰地は、岩崎真緒いわさきまおと付き合っていた。真緒とはもちろん、大学の入学式の翌日、泰地が告白した女性である。

告白の後、2人は10分ほど見つめ合っていた。しかし、泰地には全くの一瞬に思えた。そしてその後、2人は一言も話さずに、帰路へとついた。互いの家は、思いの外近かった。泰地の借家から、公園を抜け、4分も歩けば、真緒の家に着く。2人は待ち合わせの場として、よく公園を利用していった。

公園に着くと、もうそこに真緒は居た。

「おーい、真緒おー！」

泰地が声を上げると、俯いていた真緒の顔が上がった。

「もお、遅い。何分待ったと思ってるの？」

「ゴメンゴメン。ちよつとヤボ用でね」

眉を軽くしかめる真緒に、泰地は手を合わせて謝った。

「うん。もういいよ。泰地が来てくれただけで嬉しいから」

微笑む真緒の言葉に、泰地は感動し、真緒を軽く抱きしめた。真緒は全く抵抗せず、泰地に身を任せている。

そして、泰地は静かに身体を離れた。そして、互に見つめ合い、泰地からキスをした。

一瞬、唇が触れ、そして離れた。

そして、また顔を見つめる。泰地は、少し笑みを零し、真緒の手を取り歩き出した。

2人は、いつものんびりとしていた。世界が回る速さより、ずっと遅かった。今も、一人で歩けば10分もかからない距離だ。でも2人は歩を緩めて談笑し、20分かけて真緒の家へと着いた。

「ただいまあ」

「お邪魔します」

2人が言っていると、リビングから真緒の母親が出てくる。

「いらつしゃい、泰地くん。」

「あ、おばさん。お邪魔します」

泰地は礼儀正しく会釈する。確か真緒の母親は、舞子まいこさんだった。泰地は、頭の隅で確認した。

「パパ。泰地くんがいらつしゃったわよ！」

おばさんが振り向き叫ぶと、リビングから低い声が響いた。

「え？ おじさん、もう帰ってるんですか？」

玄関に掛けてある時計を見る。まだ夕方の7時だ。

「あら？ 帰ってちゃいけなかつたかしらあ？」

おばさんは口元を緩め、泰地に微笑む。真緒はおばさんに肘で小突かれ、「もう、ママあ」と文句を言っている。

「あ、じゃあ、挨拶させてもらってもいいですか？」

「もちろん。じゃ、上がってね」

おばさんに促され、リビングへと上がる。

「今晚は、おじさん」

そこには、しかめっ面のおじさんがいた。おじさんの名は、龍男たつおさんだ。名は体を表すとはよく言ったものだ。いつもこの顔を見る度に、少し怯えた感情が蘇る。

「ん。ああ」

おじさんは泰地を見、そう言っているとTVに視線を戻した。

「ゴメンなさいね、無愛想で」

おばさんが、泰地に向かってそう言った。

「いえ、そんなことないです、よ…」

言い終わるより先に、真緒に腕を引つ張られ、一瞬言葉が詰まる。「もう、真緒ったら。泰地くん、こっちはいいから真緒と遊んであげてちょうだい」

「あ、はい」

腕を引かれたまま、泰地はおばさんの言葉に頷く。

真緒に腕を引かれ、2階へと上がる。泰地は、真緒のなすがまま、2階の真緒の部屋へと連れてこられた。

「もう、ママと話してないで私に構ってよお！」

「うん、分かったから。怒らないで。ほら」

そう言って、泰地から手を握り締める。真緒は、これをしてもらうと落ち着く、とよく言っている。実際、彼女は怒りを鎮め、もうすっかり落ち着いた様子だ。

「ねえ。さっき電話で、料理食べに来てって言ってたけど、創らないの？」

「うん。まだね。もうちょっとしたら作るよ」

泰地はさっきリビングに入ったときの部屋の様子を思い出した。

「でも、リビングにはもう料理あったじゃん」

真緒は少し不安な顔をした。

「うん。でもあれはママが作った料理だから… やっぱ私が作ったのじゃ嫌なの？」

真緒の表情に、泰地はギクツとした。またやってしまった。泰地はそう思った。彼は、雰囲気を読めず、彼女の気持ちを読み切れず、それが理由で今までの彼女とは終わってしまったのだ。幾度も己の性格を呪ったが、呪ったところで直せはしない。だから、今もボロをだしてしまっただのだ。

「ごめん。そういう意味じゃないんだ。ただ、早く食べたいなあって思ってた…」

その言葉に、真緒は表情を取り戻し、「良かったあ」と小さく言った。泰地は、嘘をついたことに、少なかれ罪悪感を抱いていた。早く食べたい。それは嘘だった。何せ、真緒は可愛いが、家事が苦手なのだ。そして、彼女の料理は泰地の口には合わない。不味いのではない。俺の口には合わないだけだ。泰地はそう考えていた。それが彼なりの優しさだった。

「じゃあ、料理は後の楽しみに取っとくとして、何する？」

泰地は何気なくそう言ったが、また真緒がふくれた。

「何もなくていいよう。わたしは、泰地と一緒に居るだけで幸せなんだから」

泰地は真緒の好意に嬉しく思いながらも、女心は分からないとも思った。

2人はしばらく、談笑していた。笑い声は、リビングに居る真緒の両親にまで届いていた。両親は微笑み合う。しかし、舞子は俯き、少し悲しそうだった。

泰地と真緒が1階に降りてきたときには、時計は9時半を過ぎていた。真緒はおばさん呼び、台所へと入った。泰地も手伝うと言ったのだが、2人が大丈夫だと言うので諦めた。彼が手伝うと言ったのは、2人の手助けをする為でもあったが、最も大きな理由は、

自分が味付けなどをして、少しでも食べられるモノを、と思つたからである。それが彼の小賢しさだった。因みに、おばさんは見守るだけで、決して真緒の手助けはしない。以前に、同じ状況で作られた料理を口にしたことがある。惨事だった。

泰地は渋々とリビングに戻った。ソファーに座ると、空間は泰地と真緒の父親のモノになつた。泰地は真向かいに座る真緒の父親を、少々苦手としていた。顔が怖いというのもあるが、それより何より、接点が少ないことが難点だった。泰地がフツた話題を、ことごとく撃ち落す。それが、龍男の印象である。真緒の父親である以上、仲良くしておくべきだろう。しかし、泰地は今まで、彼と接することを避けてきたので、今ひとつ掴むことが出来ない。

沈黙に耐え、悩んだ挙句、たつた一つ互いを繋ぐことが出来るポイントを見つけた。それは真緒の話題である。泰地は、無い勇気を振り絞つた。

「あの、おじさん」

「ん。なんだ」

「えっと、真緒…さんって可愛いですよね。小さい頃はどんな子だったんですか？」

「普段は余りしない、形式ばつた聞き方をする。」

「ん。そうだな。昔っから元気な娘だったぞ。」

「よし！ 食いついた！」

「是非！ 聞かせてもらえませんか？」

「つい身体が前へとつんのめる。」

「ん。そうか？」

泰地は小さくガッツポーズをとつた。それに気付かず、龍男は話し始める。

「真緒はな、生まれたときから可愛かった。目がまん丸くて、大きくてな。今のような美人になると私は思っていたよ。まあ、私に似なかつたのが良かったのかな」

泰地はハツとし、慌てて笑つた。

「そ、そんなことないですよ。おじさんに似てるじゃないですか」

「ん。そうか？」

「ええ。笑ったときに出来るえくぼだとか、えくつと、そうだ首から肩にかけてのラインだとか」

泰地は適当に言つてのけた。そして、後悔した。泰地は龍男の笑顔など見たことはない。そもそも、龍男のポーカーフェイス加減に感心するぐらいなのだから。ましてや、後者に至っては何を言っているのか意味が分からない。しかし、龍男は、泰地の言葉をしっかりと褒め言葉ととったようだ。

「ん。そうか。私にも似ているかね」

泰地は、初めて龍男の表情がほころぶ瞬間を見た。笑い方が、本当に真緒に似ていると感じた。もちろん、その頬に浮かぶえくぼも見逃さなかった。

「はい、とても似てますよ。」

今度は本音だった。

「ん。ありがとう。昔、真緒が友達を連れて来たときに、私の顔を見てその友達が泣いてしまつてね。まあ、昔から顔にコンプレックスを抱いてはいたがね。それ以来、真緒が不憫に思えて仕方がなかった。ん。でも、真緒が好きになった君がそういうのなら、安心出来るな」

龍男は、泰地の目を見て笑った。その表情を見て、泰地は色々な感情を覚えた。喜びだけではなく、哀しみや憐れみなどが感じてとれた。泰地は龍男の奥にある感情を読み取るうとした。しかしその試みは、真緒達がリビングに入ってきたことによつて絶たれた。

料理が並べられた今、3人の視線は泰地へと注がれていた。泰地は汗が滴るのを感じた。彼は以前の記憶を振り払い、腹をくくつた。スプーンを手に取る。ごくりと唾を飲み込む。そして、目の前のオムライスにスプーンを差し込む。スプーンと皿のぶつかる、カチンという音が鳴った。スプーンを滑り込ませ、オムライスをすくう。

目をつむり、一気に口に頬張る。噛む。噛む。かむ。カム…

飲み込みたいが飲み込めない、そんなジレンマに耐えつつ、口一杯にオムライスを含んだのが間違いだった。まず始めに、舞子にらむ。しかし、舞子は弱った泰地に微笑を返すだけだ。恐らく、いや、間違いなく彼女は何か間違いか気付いていただろう。何せ、料理の知識に乏しい俺でも分かるくらいだ。いや、食えば誰でも分かる。まず、口に含んだ米全てに、もれなく芯が残っている。外側が柔らかく、噛めば芯の歯ごたえ。米が歯にくっつく感触は、味わい深いものだ。まあ、食感はこの次だ。要は、味なのだ。果たして、味は…

確かにケチャッププライスの味がする。簡単に言えば、ケチャップの味だ。そして、卵。やはりちよつと硬いが、そんな細々したことはどうでもいい。2種類の味のハーモニーの中に、変なモノが混ざっている、と思う。変なモノの変な感触が、やたらと気持ち悪さを強調している。初めは、それが何か分からなかった。一口目を無理矢理胃に流し込む。泰地は、真緒に涙混じりの笑顔を送る。二口目を口に入れる。咀嚼する。アゴが疲れてきた。少しアゴを休めようとしたときに、やつと変なモノの正体が分かった。

僅かに。本当に僅かだが、鉄の味がする。鉄の。

泰地はケチャッププライスの赤に目を移した後、真緒を見、舞子を見た。二人は笑顔だ。真緒は、少し不安げな。多分、味の評価を気にして、泰地の機嫌を伺つてのものだろう。舞子からは、「あ、あ、食べちゃった」的な感じの笑顔だ。ずっと、真緒の料理の腕を知った上での、俺への嫌がらせだと思っていた。でも、おかしい。多分、この味は、血の味だ。

一口だけ食べて、俺はスプーンを置いた。これ以上食べたいとは思わない。恐怖心が芽生える。顔を上げると、真緒が眉をしかめてこつちを向いている。

「美味しく、なかった？」

ためらいがちに聞いてくる真緒。

「いや、不味くはないけど…何か調味料、間違っていないかな？」
泰地は、無難な方へと逃げた。

「え？ ううん。間違っていないはずよ。ね？ ママ」

「ええ、何も間違っていないかったわよ」

嫌な予感がする。背筋が寒くなる。

「ちよつと、食べてみてもらえますか？」

そう言つと、急に舞子の表情が変化する。

「いいえ、真緒が折角貴方の為に作ったんだから。私が食べちゃ意味無いじゃない」

これは危ない。本能がそう言う。

「ん。じゃ、味見つてした？」

真緒に尋ねると、真緒は首を横に振る。急に龍男が、無表情のまま立ち上がり、リビングから出て行った。

「やっぱり、何か違う気がするんですよね」

泰地は飽くまでとぼけ、食べたくないという意思表示をした。

「美味しくなかったんだ…ゴメンね、泰地…」

そう言つと真緒は涙ぐんだ。とつさに泰地は慰めの言葉を探した。「大丈夫だつて。ちよつと生臭い感じがしたただけだから。次は大丈夫だつて」

つい口を滑らせてしまった。生臭い。勘ぐられてしまったのでは、と思つた。しかし、舞子は微笑を浮かべるだけで、表情を変えない。やっぱり、勘違いかな。泰地はそう思い始めた。鉄の味に、ケチヤップの赤。その所為で血かとも思つたが、単に、間違えただけかもしれない。そつだ。フライパンだつて鉄じゃないか。よくは分からないが、何となく溶け込むことだつてありそうじゃないか。ほら、よく考えてみるよ。万が一、血だつたとしよう。それがどうして、真緒やおばさんの血になるんだ。鶏肉の血かもしれないじゃないか。もつとよく考えるよ。お前の浅はかな推測の所為で、真緒は泣いたんだぞ。しかも、舞子さんを疑つたりして。恥ずかしくないのか？勝手に自責し始め、自己完結した泰地は、時間も時間なので帰宅

することにした。もう11時をとうに過ぎていた。真緒が送ってくれると言うが、この時間、女性を一人で歩かせるわけには行かない。「今日はありがとうございました、おばさん」

「いいえ、いいのよ。またいつでも遊びに来てね」

「はい。分かりました」

舞子に挨拶をした泰地は、真緒に向き直った。

「…ゴメンね、泰地。今日がっかりさせちゃって」

まだ気にしているのか。おばさんの前だけど、ここはいつちよ…

泰地は、真緒の額に自分の額をくっ付けた。

「そんな落胆してる真緒の顔なんてみたくないぞ。俺は笑ってるお前の表情が好きなんだから」

そう泰地が言うと、真緒は目を泰地に向け、「うん！」と大きく頷いた。

「ん〜。まだ甘いな。笑顔が足りない。よし、こんなときは…」

泰地は額を離し、軽くキスをした。

真緒はびっくりした後、にんまりと笑った。

「よし！ 真緒に笑顔が戻った。これで今日の俺の任務は終わり。帰るとするよ」

「うん… じゃあね、泰地」

まだ寂しそうに、でも空元気を使って真緒は笑った。

「ああ、じゃあまた明日」

泰地は真緒に背を向け、歩き出した。少し歩くと、振り向き手を振った。それに反応して、真緒を手を振った。

真緒と舞子は互いを見て、家へと戻った。

数日後。

泰地は、公園のベンチに座っていた。泰地は、悩んでいた。彼は、真緒と付き合っていくことに、少しの疑問を抱いていた。最近、倦

怠気味なのだ。何が不満というわけではないが、ただ何か足りないのだ。もちろん、真緒のことは今でも好きだし、可愛いとも思う。しかし、違うのだ。決定的に何か足りない。泰地の頭の中は、同じ事を何度も考えていた。公園に来てから、もう2時間は経っている。

今日も、真緒の家へ行つた。彼女と居ると、楽しいし和む。でも、真緒と一緒に居ても、胸が虚ろになる。決定的だった。今まで、感じてはいたけれど、隠してきた感情。しかし、隠せないほどに、大きくなってきていた。泰地は頭を抱えた。別れようかとも考えた。でも、嫌いではないのだ。愛しているのに、離れることなど出来ない。泰地は、悶々とした夜を過ごしていた。

泰地が考えることを諦め、放心状態になってからどれくらいの間が過ぎただろうか。公園に入ってくる、1つの人影があった。泰地は人影に気付く、ふと顔を上げた。時計が視界に入る。時計は午前2時をもう過ぎていることを、泰地に知らせた。こんな時間に……と自分を棚に上げて、泰地は思った。人影が街灯の下を通つたとき、泰地はその顔を見た。真緒だった。泰地は、少し気分を高揚させたが、少し気分をなえさせた。少し躊躇したが、ここで話しかけないのも後ろめたくて引つかかる。だから泰地は、真緒に声をかけようとした。しかし、彼女は泰地に気付かないまま、つかつかと歩いていく。泰地は真緒を追つたが、見失ってしまった。

きよるきよると周りを見渡してみると、茂みの奥に真緒を見つけた。泰地は真緒に近付こうといたが、真緒の行動に驚愕した。

彼女はカッターナイフで、自分の小指を切った。驚きの余り、泰地は声も出せなかった。泰地は彼女がリストカットをしていると思つた。でも、違つた。真緒はその小指を、自分の唇に這わせた。彼女の唇が赤く染まる。しかし、まばたきをした次の瞬間には血の色は消えていた。元の彼女の唇だった。

そうか。そういうことか。泰地は笑つた。

真緒は、ずっと泰地に呪まじないをかけていたのだ。彼が真緒のことを好きになるように。己の血で。でも、泰地はおかしいと思った。彼は、大学の入学式の日より前に、真緒に会ったことはなかった。それなのに、どうして俺は彼女を好きになったんだろう。そんな泰地を尻目に、真緒は帰路へとついた。真実を知った泰地は、本能で喜んでいて。泰地の胸は、狂喜で溢れていた。彼は自分の望んでいたモノを見つけたのだ。泰地は、真緒の血を欲していた。そして、真緒は泰地を繋ぎとめようと、自分の血を使う。つまり、泰地は真緒をと付き合っさえいれば、永遠に彼女の血を得られるのだ。彼女を好きになつた理由なんてどうでもいい。泰地は笑った。

翌日、泰地と真緒は大学まで一緒に行った。真緒は、いつもと同じ様に楽しそうに泰地に話しかけている。泰地は、微笑んでいる。友達と擦れ違つと、真緒は軽く挨拶を交わした。泰地は、微笑んでいる。そして、大学に着き、校舎内に入る。教室が違つので、2人はここで別れなくてはならない。

「……」

一瞬の沈黙。真緒は俯いている。

泰地は、微笑んでいる。

真緒が泰地の目を見つめる。真緒が目をつむると、その唇に泰地の唇が触れた。互いの唇が離れ、再び見つめ合う。始業のチャイムが鳴る。

「じゃ、また授業の後でね！」

急ぎ足で教室へと駆けて行く真緒。その後姿を見て、泰地は微笑んでいた。

そして、舌なめずりをした。

泰地は、心の底から笑った。

F i n .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2129c/>

愛は盲目

2010年10月8日15時15分発行